作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄先生



『風前鳥語和』尤珍

（風の吹くところで鳴く鳥は、声もやさしく聞こえる。）

新緑の山に吹く爽やかな風に響く鳥の鳴声をやや強調して表現してみました。

「醉佳客」莫叔明

（よき客と酒を酌む。）

楽しい酒を豪快に力強く表現してみました。

～西来院～

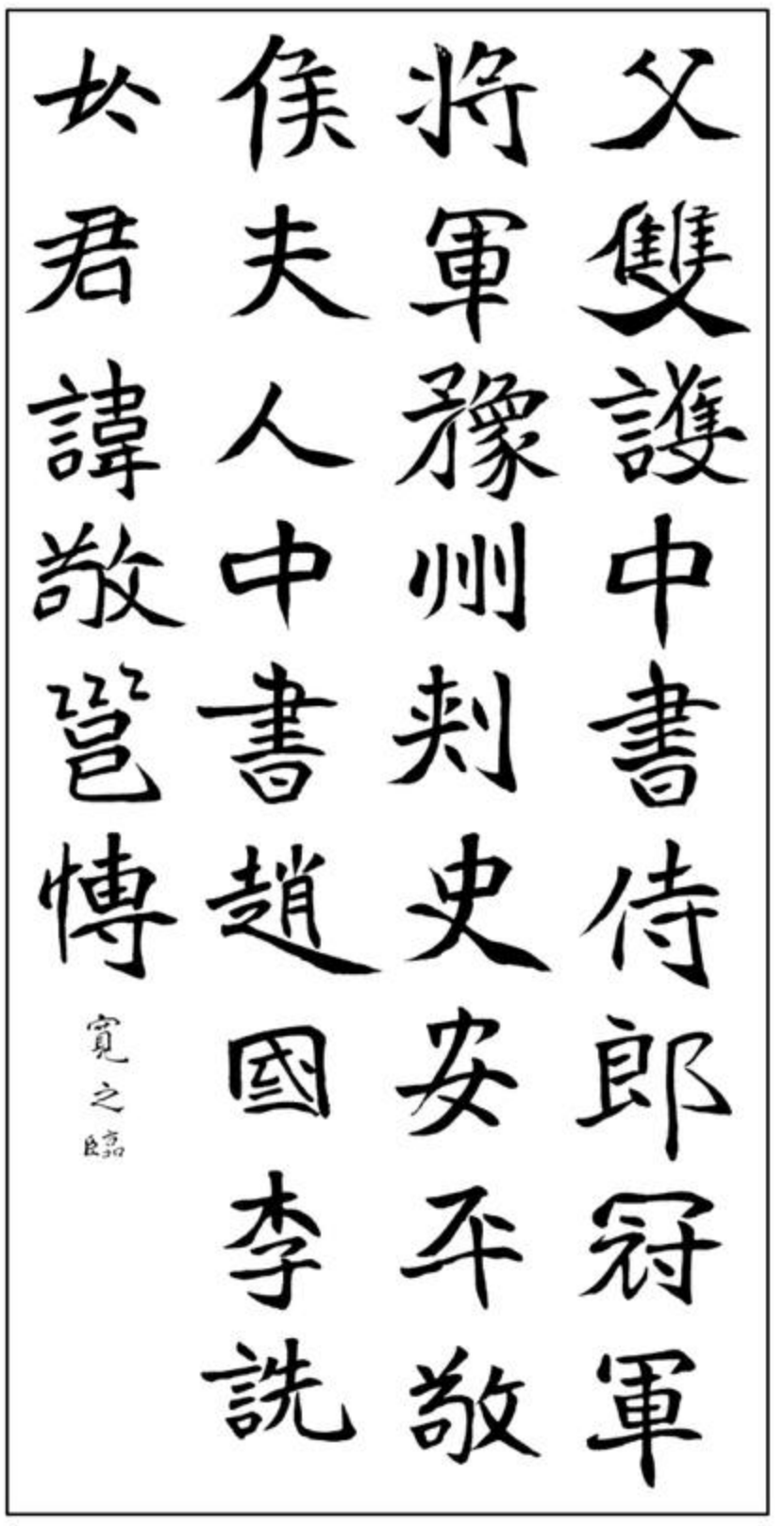
一．荒巻拓哉　二回生
臨書　草書　傅山『七言絶句幅』　半切
「龍王社鼓閙村雩抛却殘書也杖扶愁無角抵酬花眼誰好麈糟俯竈觚」
楷書と同時並行で制作していると、やっぱり草書はのびのびと書けて楽しくて良いです。



二．石川敬一　二回生
臨書　隷書　『曹全碑』　半切
「秦漢之際曹参夾輔王室。世宗廓土斥竟。子孫遷于雍州之郊。分止右扶風。或在安定。」
独特なものをやってみたいと思い、初めて隷書に挑戦してみました。今回書いたのは字体にとても魅力を感じた『曹全碑』の臨書です。出来る限り、隷書の特徴である横長を意識したのですが上手くいきませんでした。同じ横棒でもいろんな種類があったり、と様々な発見ができてとても楽しかったです。ご品評よろしくお願いします。



三．植島寛之　五回生
臨書　楷書　『崔敬邕墓誌銘』　全紙
「父雙護中書侍郎冠軍將軍象州刺史安平敬侯夫人中書趙國李詵女君諱敬邕博
墓誌銘とは墓主の名前や業績を石に彫り込んだもののことです。石に彫られたかのような質感を目指しました。



四．牛山泰喜　二回生
臨書　隷書　『史晨碑』　半切
「文命綴紀撰書脩…」
隷書作品の良さが出せるよう構成と線質に気を付けて制作しました。もとは石碑ですが、筆で書いた線の面白さが出せていれば最高です。



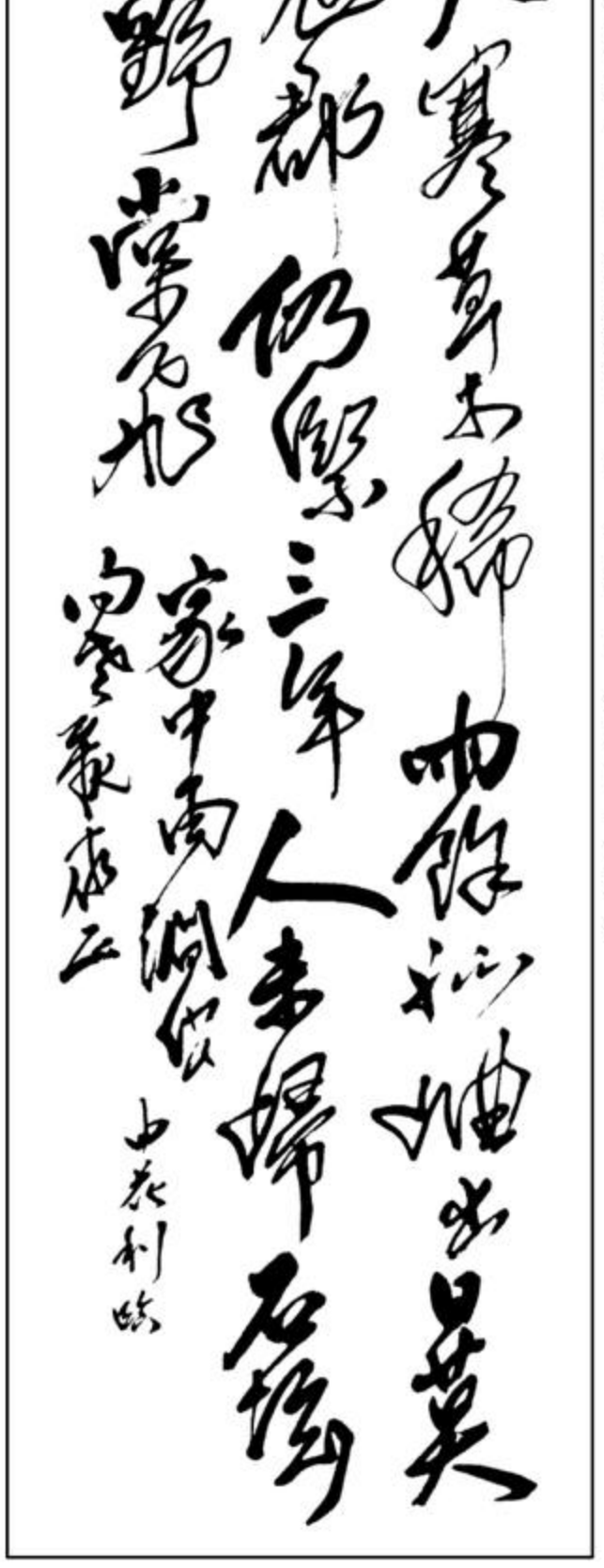
五．稲葉由花利　三回生

臨書　行草書　王鐸『家中南澗作』　二尺×八尺

「家硼誰登眺。天寒草木稀。雨餘孤岫出。日莫衆禽依。諸寇郡仍緊。三年人未歸。石壇偃臥否。處々野棠飛。家中南澗作。」

全体が完成している作品が作りたくて。まっすぐじゃないし均等じゃない、でも全体として一つの作品になっている感じ。この作品を通して学びたかったのは、周囲を俯瞰しつつ一個一個の字を書く術、それから某王鐸マスターの先輩の線質です。

私にはよくあることですが、テンションがあがると二八に収まりきりません。次は三八かな…。



六．上西隆太　二回生

臨書　草書　王鐸『臨王羲之瞻近帖』　二尺×八尺

「足下参朝少晩不審有何事情瞻近縁足下小大悉平安也月末必佳遅見君無以爲慰喩羲之丁卯春夜爲思玄老先生詞伯王鐸」

初めて二八作品に挑戦しました。初めての王鐸ということもあり、苦労した点は多々ありますが、王鐸の自由な書きぶりは、飽きることなく、楽しんで書くことができました。まだまだ経験も浅く、王鐸の書を少しでも表現できたか疑問ですが、今の自分の精一杯が出せていれば幸いです。



七．闍妹恒　二回生
臨書　行書　臧遠科『帰田園居』　二尺×六尺
「少無適俗韻 性本愛丘山 誤落塵網中 一去三十年 羈鳥恋舊林 池魚思故淵 開荒南野際 守拙帰田園 方宅十余畝 草屋八九間 柳蔭後檐 桃李羅堂前 曖曖遠人村 依依墟裏煙 狗吠深巷中 鶏鳴桑樹顛 戸庭無雑塵 虚室有余閑 久在樊籠裏 複得返自然」
緩やかで、静かな生活がいいですね。

八．大石龍太　三回生
臨書　楷書　『魏霊蔵薛法紹造像記』　半切
「撃龍花悟無」
造像記の一行書きに挑戦させて頂きました。原本と自分らしさの狭間で悩みましたが、紙いっぱいに書くのはやめられませんでした。スミマセン・・・。



九．大泉陽輔　四回生
創作　隷書　『廣漠風』　全紙六分の一
「廣漠風」
物淋しく立つ風にはっと振り返る、そんなイメージ。



十．大庭諒介　修士一回生
創作　甲骨文　『和風』　半切
「和風吹緑野」
漢字の軸作品を作るのは一年半ぶり。「大庭氏は英字しか書かなくなったの？」とか、「大庭氏は西洋かぶれなの？（笑）」とか、そういう類いの批判・雑言には飽き飽きしてきたので、今回は造形として面白い甲骨文に挑む。吉田で吹きわたる和やかな風を渇望して、桂からこの作品をお届けする。



十一．角谷遊野　二回生
臨書　行草　文徴明『行草千字文巻』　半切
「雲騰致雨露結為霜金生麗水玉出崑岡」
二作品を出すのは自分には向いていないと痛感しました。この作品では、全体が奏でるリズムのようなものを感じて頂けたらと思います。濃淡の付け方が課題でしたが、うまくいったでしょうか。ご批評よろしくお願いします。



十二．河合翼　三回生
臨書　楷書　欧陽通『道因法師碑』　半切
「翼教岷益騰声巴漢・・・」
このようなきちんとした楷書は初めてでした。滲んでもかすれてもだめと言われた僕を見てください。



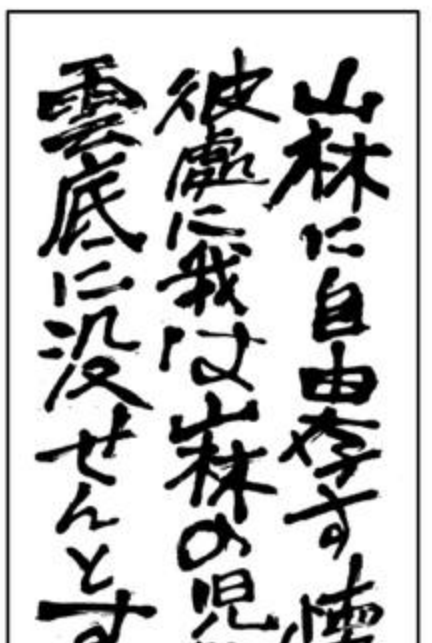
十三．小島健史　三回生
臨書　仮名　『仮名古典寄集』　半切
「やどのむめす(春)こしとこひ(悲)た(多)るひ(悲)とのか(可)へりごとに　むめ(免)の花ちり(利)にしやどのさびしき(支)にうき(支)みた(堂)つぬるひともあり(利)け(希)り(里)」（伝藤原行成『針切』）
「いま(万)は(者)ゝやこひ(悲)しな(那)ましをあひみ(三)むとたのめしこと(登)ぞ(曽)いのちな(那)り(利)ける」（伝藤原行成『升色紙』）
パンフレットには二種類のみ掲載していますが、作品は複数の仮名古典をひとつの掛け軸上に配置しています。仮名作品を書くのは初めてで、しかも複数種類の仮名作品を書くということで非常に苦労しましたが、新たな視野を広げることが出来て良い経験になりました。ご批評の程よろしくお願い致します。



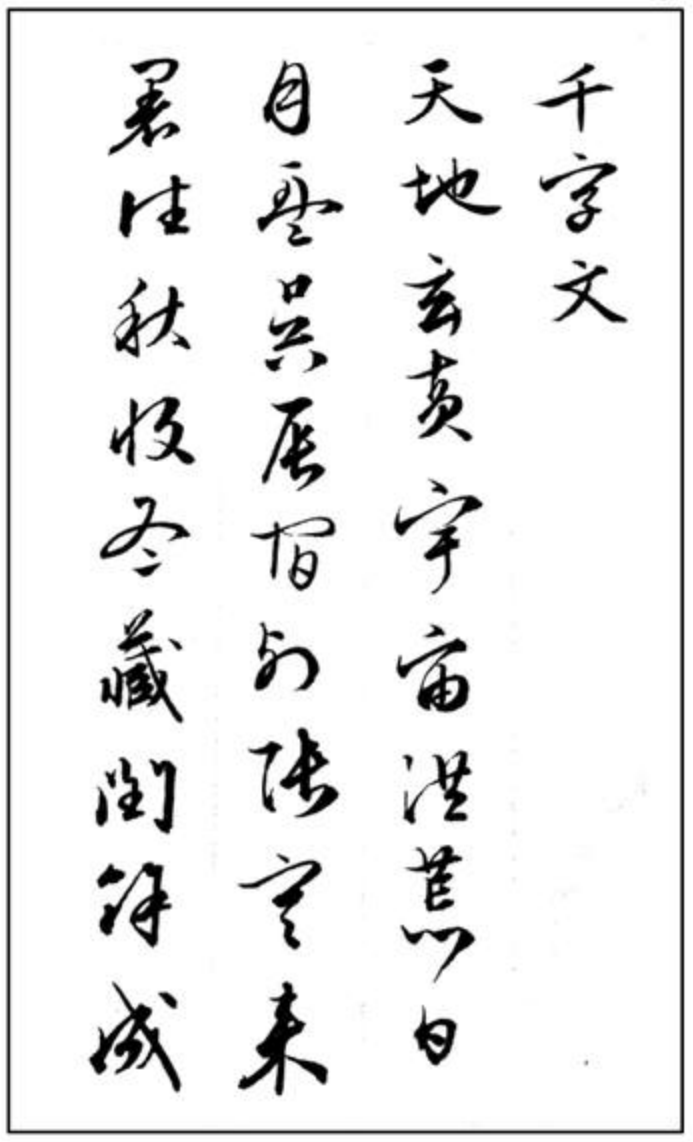
十四．河原理恵　三回生
創作　行草　『杜甫　絶句』
「江碧鳥逾白山青花欲然今春看又過何日是帰年」
私にとって節目となる今回、今まで目をそらしてきた創作に踏み出さなければならないという焦りと、これからの書道活動に向けて新たな面を作っていきたいという思いから、この作品を書きました。この詩にあるように、今春は書道に捧げ帰省する機会を逃してしまいましたが、それも今となっては良い思い出です。



十五．小島健史　三回生
創作　調和体　『山林に自由存す』　半切
「山林に自由存す懐かしき我が故郷は何処ぞや彼処に我は山林の児なりき顧みれば自由の郷は雲底に没せんとす」
雪が残る東北の枯れた山林に孤独と憧れを感じました。もしかしたらそれは、したい事や出来ることが格段に増えた現代に生きるからこそ見えてくる自由だったのかもしれません。
何とも自己中心的な作品を書いたものだと思いますが、まぁ悔いなく幹部の任を降りられそうで幸せです。偏に感謝ですね。



十六．小松聡子　四回生
臨書　行書　文徴明『行書千字文巻』　30×16cm の折帖
「千字文　天地玄黄宇宙洪荒…」
文徴明は若いころ字が下手なせいで試験に落ちてしまったので、それから千字文を一日十回練習して書道の腕を磨いたそうです。才能ないんちゃうかなって思っても、こつこつ続ければ道は開ける。そう信じて、書道だけでなく勉強も研究もがんばります。



十七．河原理恵　三回生

臨書　楷書　趙之謙『楷書汜勝之書八屏』二尺×八尺

「凡耕之本在于趣時和土務糞澤早鉏穫春凍解地氣始通土一和解夏至天氣始暑陰氣始盛土復解夏至後九十日晝夜分天地氣和以此時耕田一而當五名曰膏澤皆得時功」

一回生の頃に練習した古典ですが、この字の独特な力強さへの憧れが捨て難く、今回作品にすることにしました。前回の造像記に続き、私にはどうやら北魏系の楷書がしっくりくるみたいです。



十八．北堀雄大　三回生

臨書　隷書　徐三庚『臨爨宝子碑』　二尺×八尺

「穆穆君侯震嚮將將弱冠称仁詠歌朝鄉在陰嘉和處淵流芳宮宇數刃従得其嗇馨随風烈耀与雲揚威鴻羽儀龍騰鳳翔」

インパクト、インパクト、インパクト。

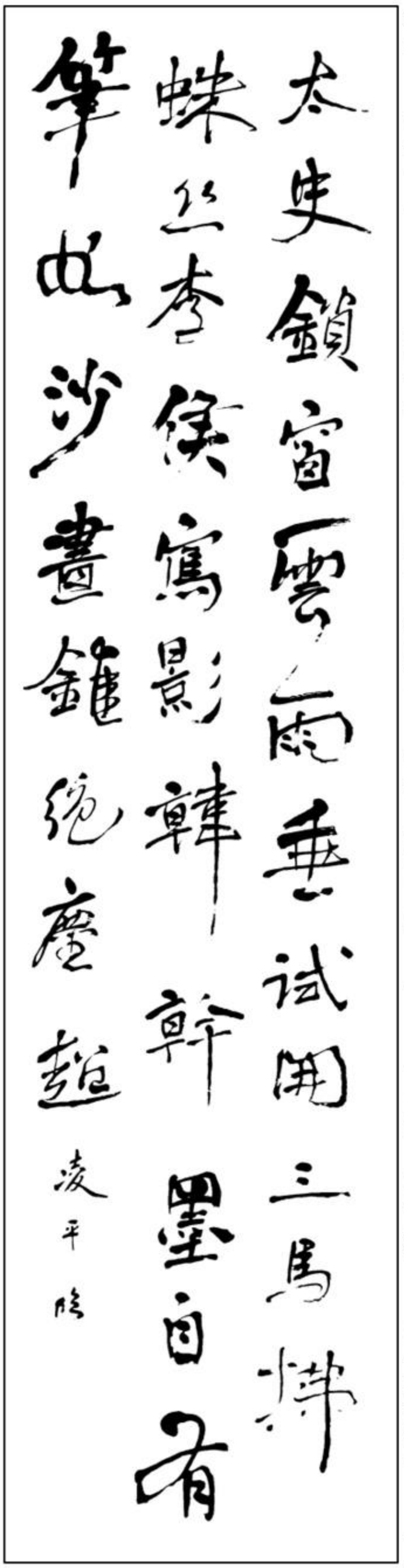


十九．藏岡凌平　二回生

臨書　行書　何紹基『畫馬贊』　二尺×八尺

「太史鎖窗雲雨垂試開三馬拂蛛絲李侯寫影韓幹墨自有筆如沙畫錐絶壁超」

楷書を書く時のように筆をゆっくり動かすばかりでは美しい線は出ないし、草書的に筆を常に速く動かしても強弱がつかず独特な雰囲気は出せない、ある意味行書らしい字である。と、書いているうちに段々と確固たるものが自分の中にできてくるのを感じたが最後、もはや書道が愉しくてやめられません。



二十．柴田翔　四回生

創作　草書　『壮士篇』　二尺×八尺

「天地相震蕩回薄不知窮。人物稟常格有始必有終。」　年時俯仰過功名宜速崇。壮士懷憤激安能守虚沖。」

価値観や観念を押し付けることなく、ありのままの視覚的な表現から作品の根底にあるイメージを自然と感じ取って頂けるよう意識しました。



二十一．篠原理那　二回生
臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』
半切
「玉書金簡不足異布帛菽粟眞文字
委宛驚開先代藏詩中盡繪農桑事憶
昔章皇全盛時」
美しい線質に惹かれ、自分に足りない繊細さを学びたいと思いこの書を選びました。横作品に挑戦したことで構成、字の大きさなどを全て自分で決めることとなり悪戦苦闘することとなりましたが、自分で考える書道の面白味を感じられまたいい勉強にもなりました。型にとらわれず様々な作品に挑戦していきたいものです。



二十二．白谷暢浩　二回生
創作　調和体　『空に真っ赤な』
「そらに真赤な雲のいろ
玻璃に真赤な酒のいろ
なんでこの身が悲しかろ
空に真っ赤な雲の色」
お酒っておいしいんでしょうか。この詩の意味を本当に理解するのは、もう少し先のことです。



半切

二十三．鈴木貴也　四回生

臨書　行書　楊載『水龍吟』　二尺×八尺

「水龍吟楊中弘鴻溝定約東歸又誰遣赤龍廻指青娥舞罷重瞳飲泣斷腸聲裡半壁酸（風）雨涯寒月古今興廢眇烏」

力強い部分を生かしつつ、単調になることのないよう気を配りました。いつの間にか書道部も四年目になっていましたが、ている時間は、今も変わらず楽しいです。



二十四．時藤大典　修士一回生

臨書　行草　傅山『行草書七言絶句幅』　二尺×八尺

「穠粟男児嚊也甘。残編椸腹不嫌貪。春秋左氏伝已棄過。此書及班史。吾家世業也。小事勉之。無令有忝。」

去年、東京で開かれた王羲之展に展示されていたこの作品の原本を見て、圧倒的な筆力に感動してこの作品を臨書しました。こば幸いです。表現上のキーワードは重厚かつ爽快です。傅山が勉学に倦んだ孫に宛てて書いた書なので、そういう意味でも大事にしたい作品です。

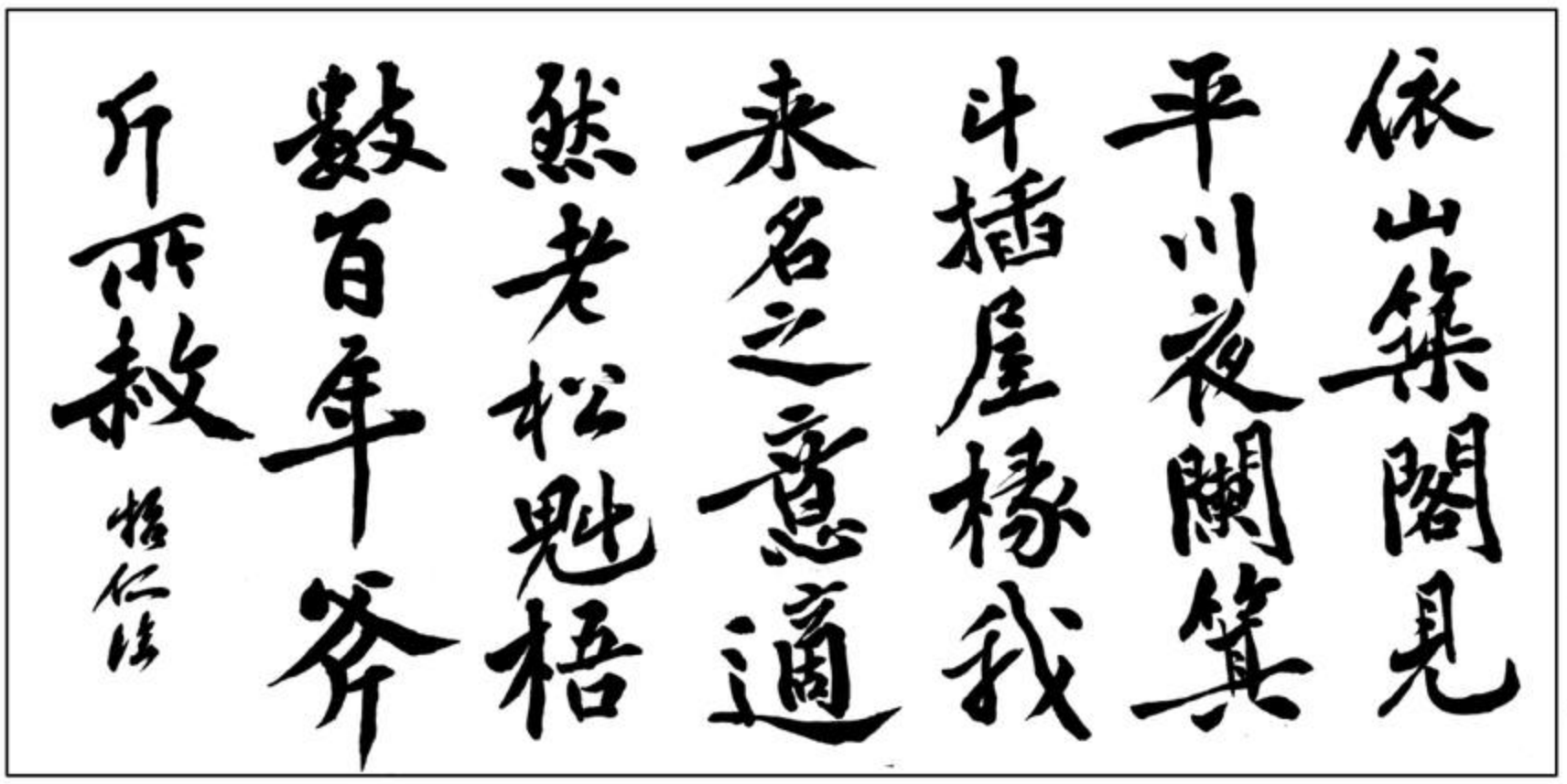


二十五．宗哲仁　二回生

臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　全紙

「依山築閣見平川夜闌箕斗插屋緑我来名之意適然老松魁梧數百年斧斤所赦」

私は王羲之の字がお気に入りで、今までの作品はすべて王羲之なのですが、自身三度目となるこの初夏書展の機会に折角なので王羲之とは違うタイプの行書をやろうと思い、これを選びました。独特の字形、線の揺れ・・・自分にとって初めての世界に苦戦しつつも、自分を成長させることができたと思います。

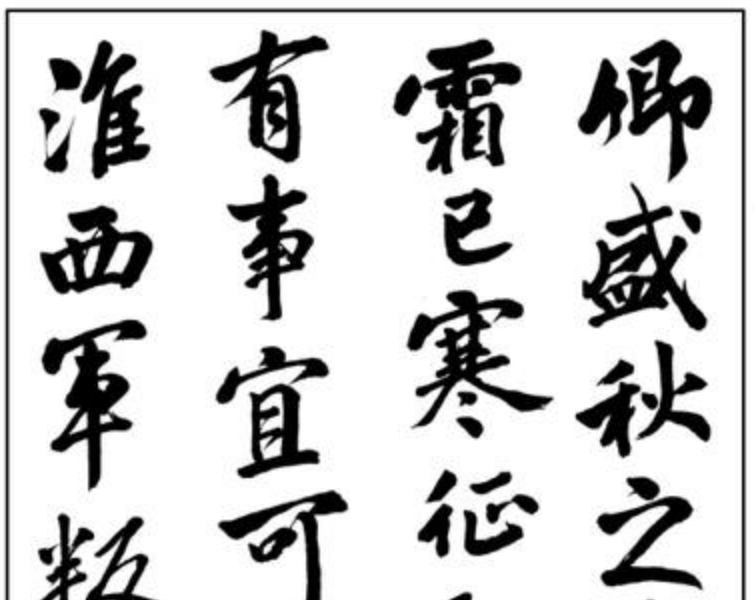


二十六．徳川鈴奈　二回生

臨書　行楷書　趙構『賜岳飛手勅巻』　全紙

「卿盛秋之際提兵按辺風霜已寒征馭良苦如是別有事宜可密奏来朝廷以淮西軍叛之後毎」

行書でありながら文字と文字の連続性があまりないこの古典に惹かれました。今回も文が意味的に途中で切れてしまいました……次回こそ！意味のある文を書きたいです！

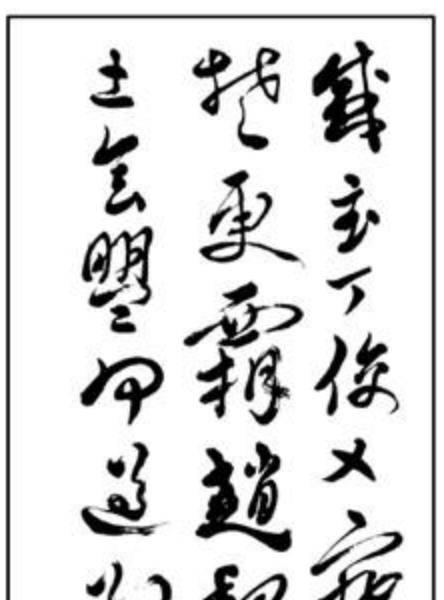


二十七．疋田研一郎　二回生

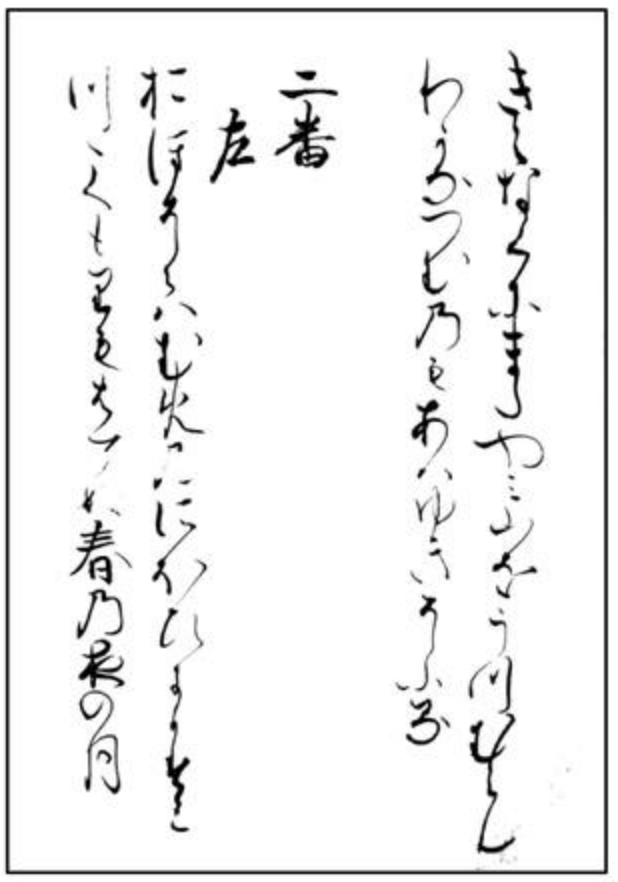
臨書　草書　陳淳『草書千字文』　半切

「感武丁俊乂密勿多士寔寧晉楚更覇趙魏困横假途滅虢踐土會盟何遵約法韓弊」

初めて米芾以外の書家の作品を書いたので慣れない部分もあり、また草書も初めてなのでまだまだ改善の余地はあると思います。しかし自分の書の幅を広げるという意味でよい経験ができたと思っています。



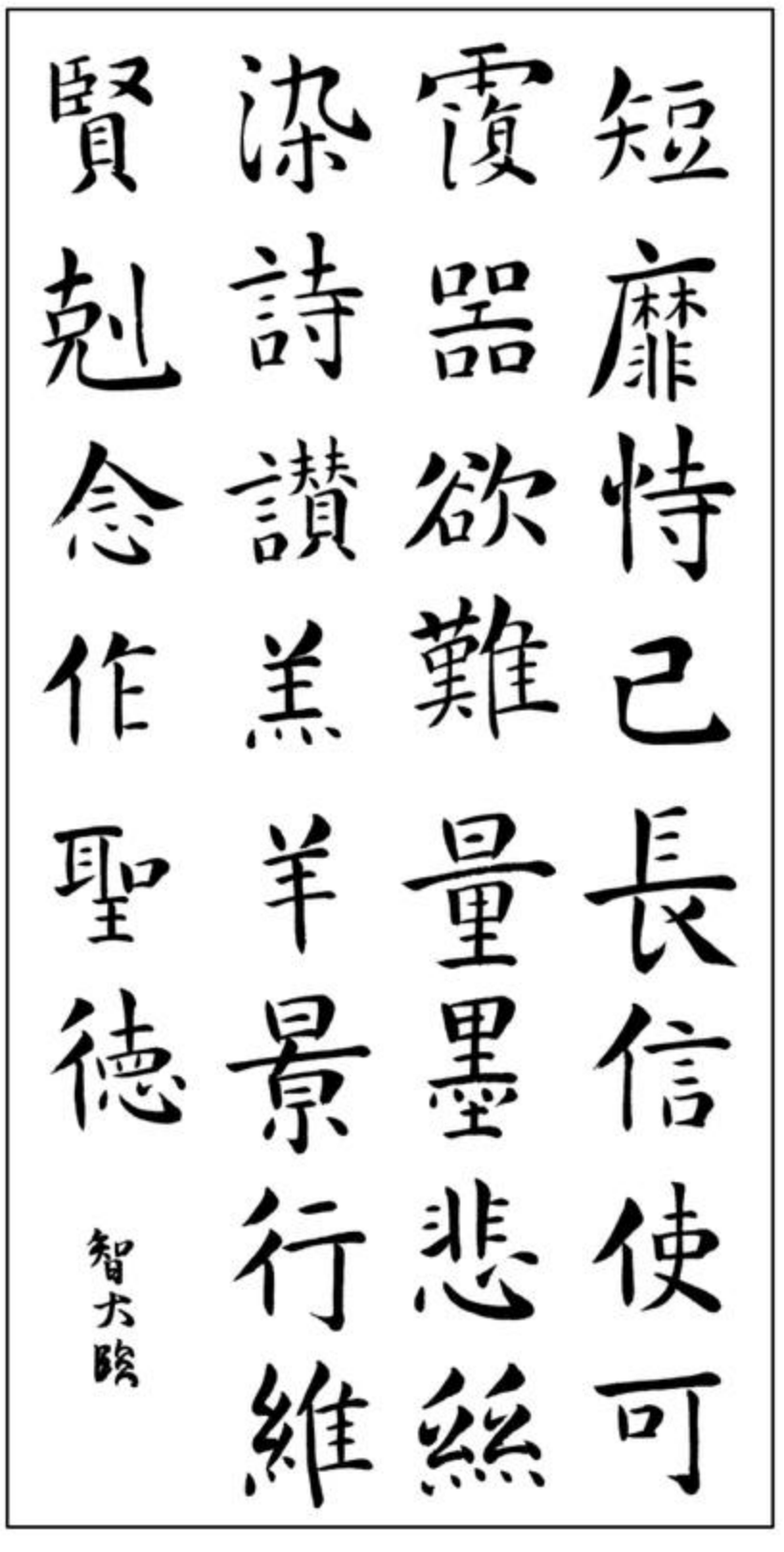
二十八．橋詰奈央　四回生
臨書　仮名　『手鑑　藻塩草』　15.5×23、14×21cm
「をとこにもたせたる　くもれともよにむつかしきかゝみには　おもふこゝろをよそにてもみき…（以下省略）」
国宝の手鑑「藻塩草」の中から特に心惹かれた二断簡を臨書しました。手鑑とは、経巻や歌書などの巻子本や冊子から一部を切り取って収集し、帖に編集したものです。藻塩草を編んだ人物があれもこれもと考えた様子を想像しつつ、断簡を選ぶ時間は楽しいものでした。



二十九．松澤祐実　三回生
臨書　行書　文徴明『赤壁賦』　半切
「清風徐來水波不興舉酒屬客誦明月之詩」
冬樟展と同じく、文徴明を臨書しました。今回書いた部分は「清風」「月」という言葉にひかれて選びました。右上がりが特徴的な文徴明の字はやはりかっこいいです。



三十．古川智大　二回生
臨書　楷書　智永『関中本千字文』　全紙
「～短。靡恃己長。信使可覆。器欲難量。墨悲絲染。詩讃羔羊。景行維賢。剋念作聖。徳」
初めて全紙に挑戦しました。なかなか自分の思うような字にならず辛いと思うときもありますが、楷書はやはり楽しいですね。



三十一．藤田雄也

臨書　草書　傅山『草書五言律詩軸』　二尺×八尺

「月黑一綫白。林底林端縈。木心信石路。只覺芒鞋平。雲霧遮不斷。禽獸蹂不崩。侶伴任前後。不護亦不爭」。初めて二八の作品に挑戦しました。傅山のような奔放さを目指して書いてはみるものの、心の迷いのせいかなかなか上手くいきませんでした。傅山の作品を通して、自由に筆を動かすという楽しみを味わうことができたように思います。ですがこの作品



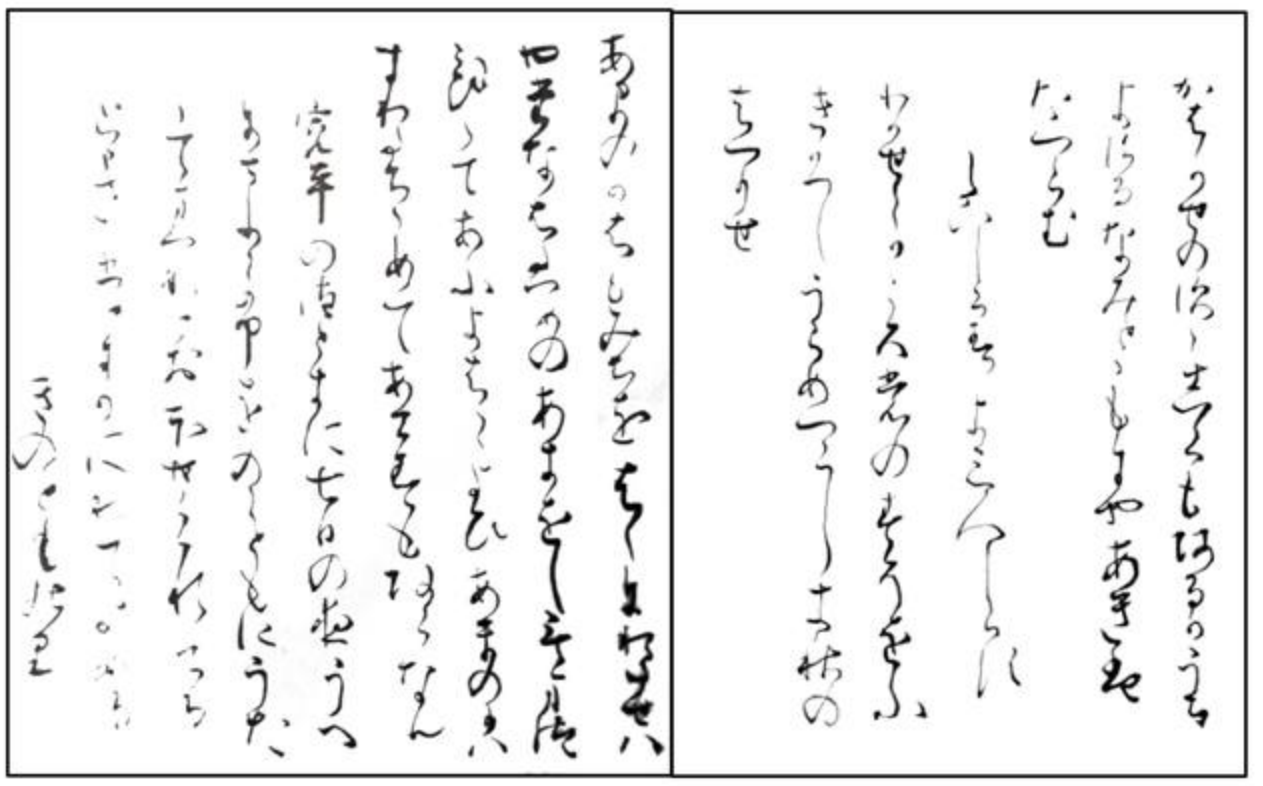
三十二．古川智大　二回生

臨書　仮名　藤原行成『関戸本古今集』　半紙二枚

「かは(者)か(可)ぜの　す(須)ゞし(志)くもあ(阿)るか(可)　うちよす(須)る　なみとゝもに(尓)や　あきは(盤)たつらむ　だ(多)いしらず(春)　よみ(三)人しらず　めづらしき(支)　秋のは(者)つか(可)ぜ」

「あまのが(可)は(者)　もみぢをは(者)しに(尓)　わた(多)せば(八)や　た(堂)な(奈)ば(者)た(多)つめの　あき(支)をしも(毛)ま(万)つ(徒)　こひこひて　あふよは(者)こよひ　あまのが(可)は(八)　き(支)り(利)た(多)ちこめて　あけ(介)ず(春)もあ(阿)らなん　寛平の御とき(支)に、七日の夜、うへに(尓)さぶらふ(布)をのこどもに、うたゝてま(万)つれとおほ(本)せらられけ(介)るとき、ひ(悲)とに(尓)か(可)はり(利)てよめる　きのともの(能)り(里)」

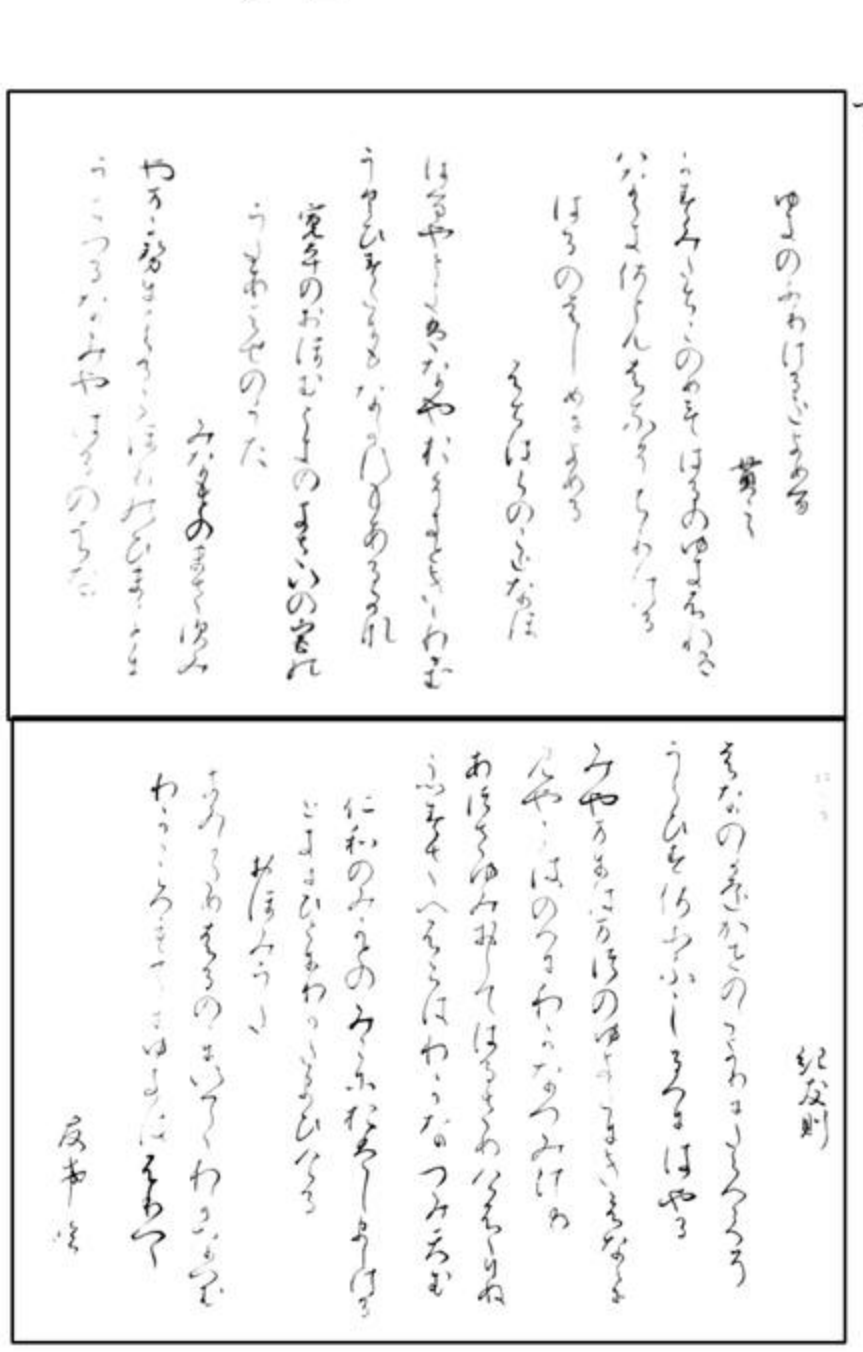
仮名で2作品目です。仮名を臨書していると、昔の人々はこのような字を普段書いていたのかと、とても歴史を感じることができます。仮名の臨書、おススメです。



三十三．宮下拓也　三回生
創作　行書　『海』　全紙
「海」
〈あ、海だ〉
〈見てこっか？　……これが琵琶湖です！〉
琵琶湖を初めてみたときの感動の表現を試みました。激しくはないけど存在感がありいつまでもずっと見ていたい、そんなイメージ。
琵琶湖を見せてくれたあの人へのオマージュを込めて。

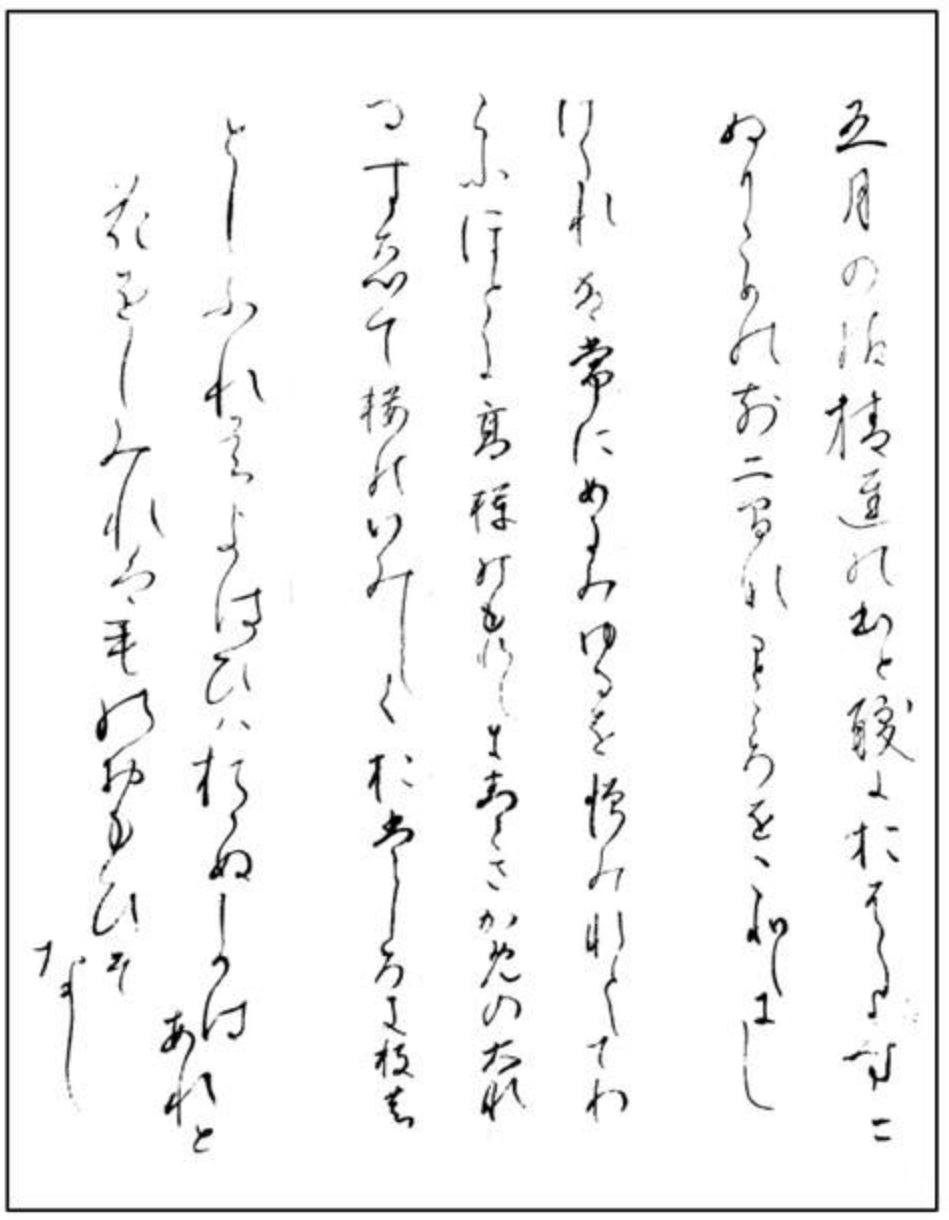


三十四．家倉凌　三回生
臨書　仮名　藤原定実　『元永本古今和歌集　仮名序』　半懐紙3枚
「やまと歌は　人のこころを種として　よろづの言の葉とぞなりにける・・・」
切なげにかすれる細い線も、墨を吸って艶めく豊満な線も、とにかく好きで好きで仕方がない。

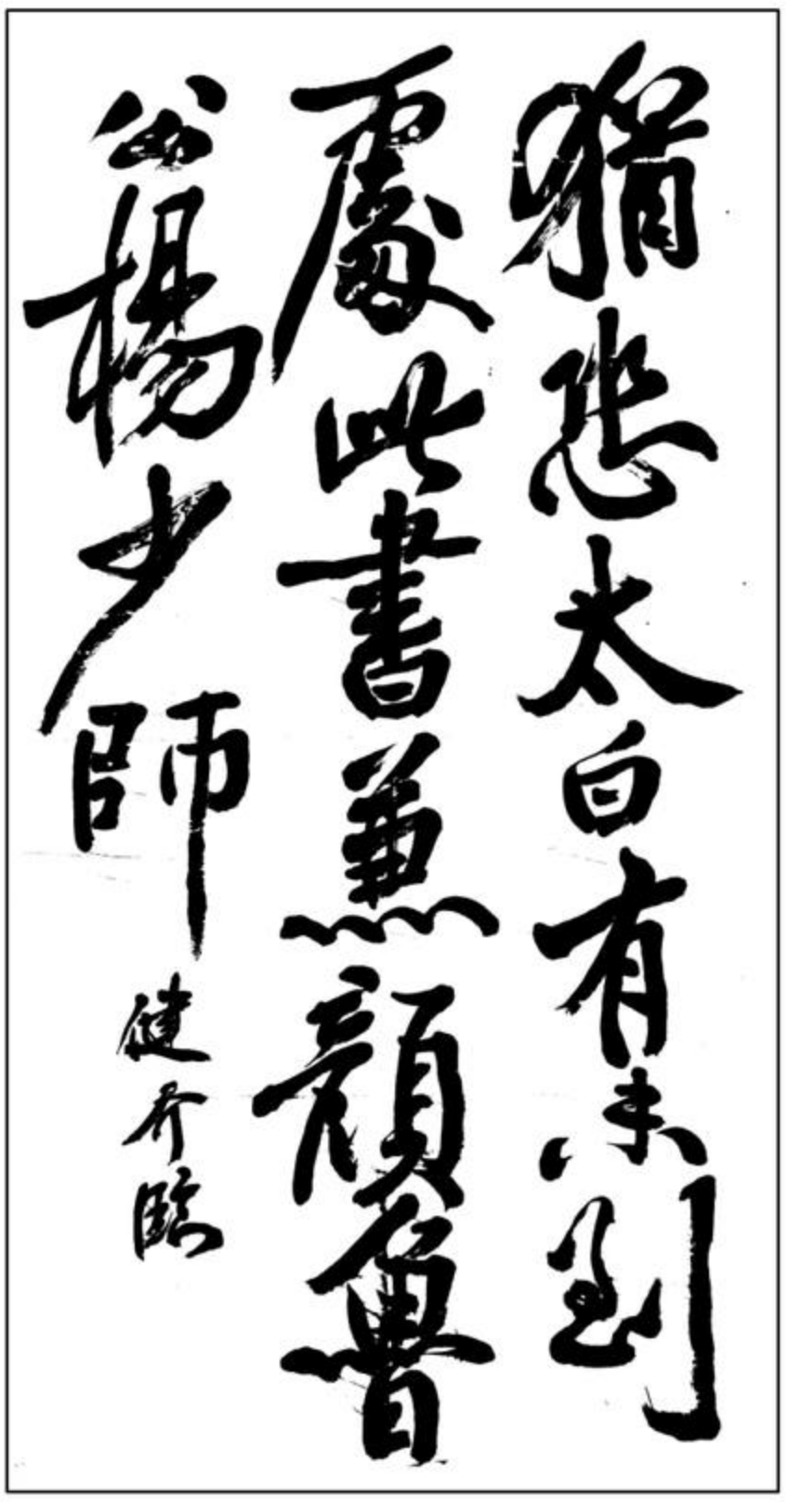


三十五．吉村友希　二回生
臨書　仮名　伝紀貫之『高野切第一種』　半懐紙二聯
「ゆき(支)のふり(利)けるをよめる(留)　貫之　か(可)す(春)みた(多)ちこのめも(毛)はるのゆき(支)ふ(不)れば(盤)は(八)なゝき(支)さ(佐)とも(无)は(者)な(奈)ぞ(曽)ちり(利)ける・・・」
この古典を臨書しようと決めた日、京都では雪が舞っていました。季節が移り夏を迎えようとしている今でも、かなのもつ優美な線質や濃淡を表現するのはまだまだ難しいです。拙作ではございますが、ご批評のほどよろしくお願いいたします。

三十六．山﨑絢香　寶官紗紀　篠原理那
創作　漢字仮名交じり文『枕草子』　二尺×二尺
「清涼殿のうしとらのすみの北のへだてなる(以下略)」
二回生になったことだし、何か面白いことやりたいということで合作に挑戦してみました。三人の個性を残しつつも一つの作品としてまとまることを目指しました。初合作、初創作、なかなかうまくいかないものです。けれどまたやってみたいと思える挑戦でした。



三十七．渡辺健介　四回生
臨書　行書　黄庭堅『黄州寒食詩巻跋』　全紙
「猶恐太白有未到處此書兼顔魯公楊少師」
一本一本の線が見せる表情は様々で、臨書していくうちにそれをリズムとして感じとることができました。一方で、その無駄の削ぎ落とされた不安定な線によって、自分の技術に真っ向から向き合わされ、自分の限界を思い知ることになりました。



三十八．家倉凌　三回生

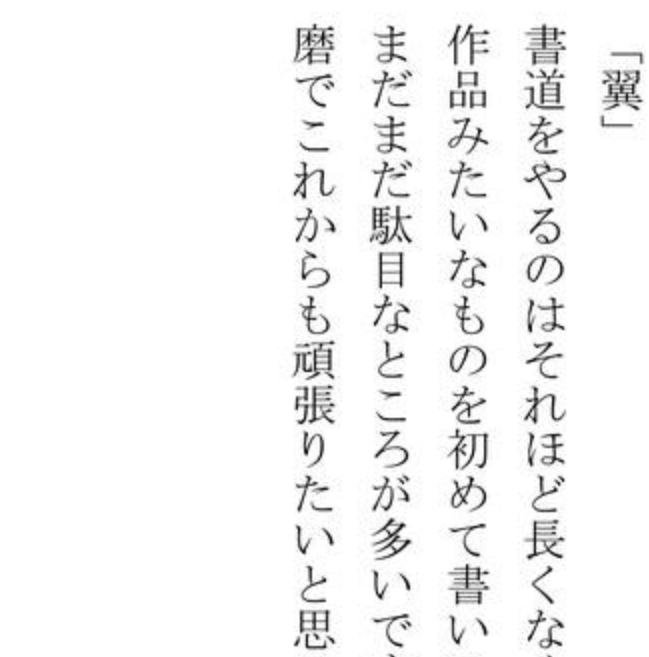
臨書　草書　懐素『自叙帖』　半切横六枚

「懐素家長沙、幼而事佛、・・・（中略）・・・時大歴丁巳冬十月廿有八日」

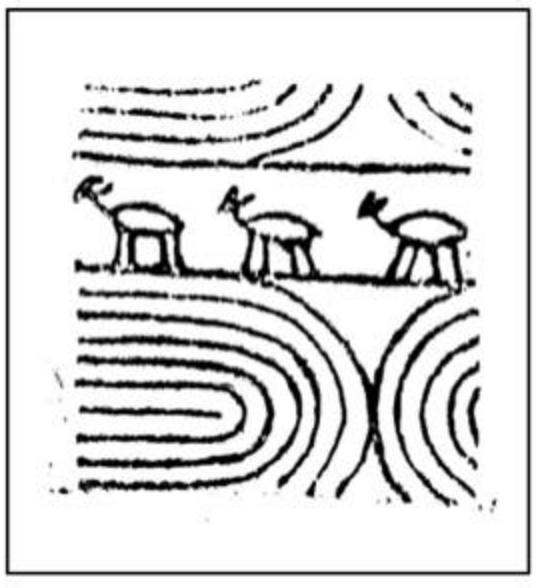
だいたい夜に書き始めて、書き終わると朝になっている。墨を擦って、紙に筆で字を書く、ただそれだけのことが、どうしてこんなに楽しいのだろう。



三十九．Tolmachev Arseny（トルマチョブ・アルセーニ）　修士一回生
臨書　楷書　欧陽通『道因法師碑』　色紙
「翼」
書道をやるのはそれほど長くなくて、そして作品みたいなものを初めて書いてみました。まだまだ駄目なところが多いですが、切磋琢磨でこれからも頑張りたいと思います。



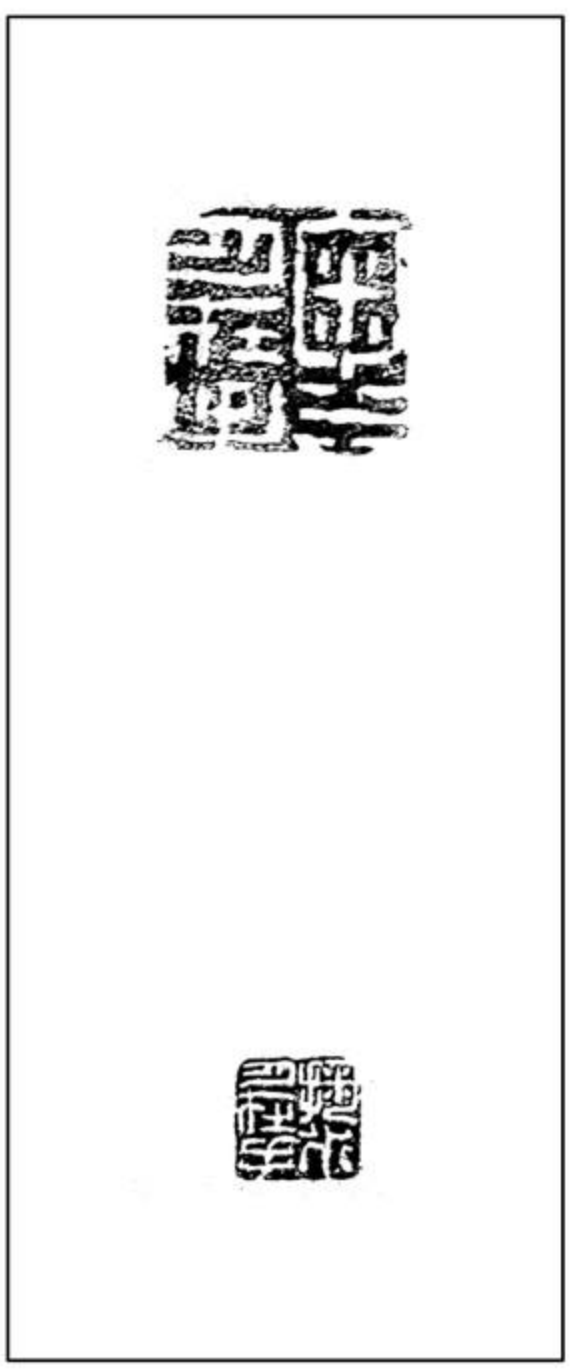
四十．川上澄香　四回生
模刻　『流水紋』　色紙
この印の、割と均質な線が静かに等間隔にある、しんとした空気にひかれて彫りたいと思ってしまいました。作者はどこに捺そうってこの印を作ったのか、私はどこにおそうかといったことを考えながら彫ると楽しいです。でもやはり難しかったです。私は特に等間隔、均質、等倍…のようにすることが苦手です。苦手とわかっているのですが、そういうものにひかれてしまいます。



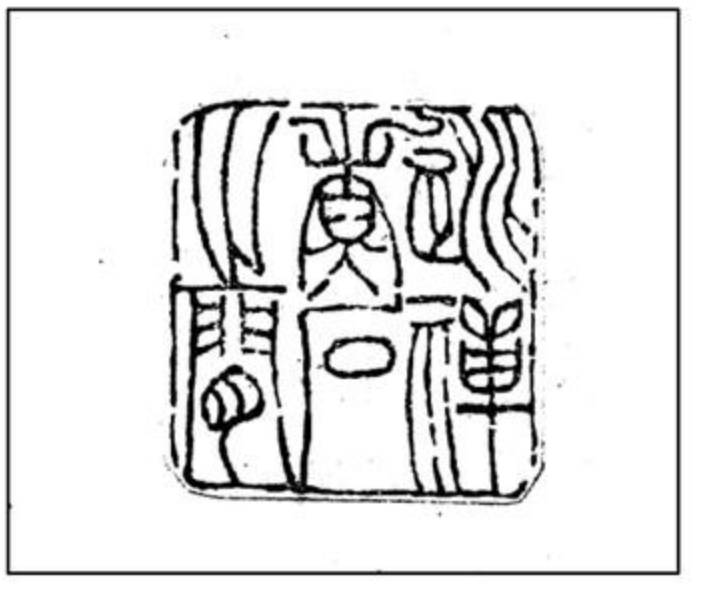
四十一．河原理恵　三回生
創作　調和体　『心を込めて』　19×54 ㎝
「笑ってくれる　支えてくれる　励ましてくれる　大事な人へ」
普段、面と向かってはなかなか言えないことも、作品を通してなら伝えられる気がします。ありがとう、心を込めて。



四十二．寺田実穂子　四回生
模刻　『高芙蓉　初代中村蘭臺』　25×15cm
「掬水月在手（水を掬えば月は手に在(あ)り)」
手で水を掬えば、遠くにある月もわが手のひらに映し出すことができる。そんな意味の言葉を用いた二人の篆刻家の作品を模刻しました。どちらも同じ文字で、似たような構成ですが、上は切れが良く、下は丸みを帯びています。篆刻作品の表現の違いに興味を持ちました。

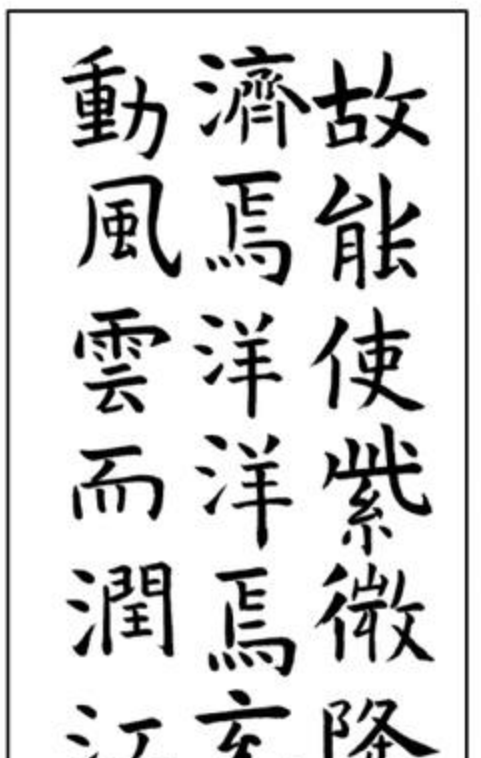


四十三．藤井結稀　四回生
模刻　篆刻　呉譲之『逃禅煮石之間』　小色紙
「逃禅煮石之間」
禅の葉っぱみたいなところに惹かれて模刻してみようと思いました。私としては一ヶ所を除いてほぼ満足のいく出来に仕上がりました。線の太細など細かい所も見ていただけたらと思います。



～禅居庵～

四十五．荒巻拓哉　二回生
臨書　楷書　虞世南『孔子廟堂碑』　半切
「故能使紫微降光丹書表瑞濟濟焉洋洋焉充宇宙而洽幽明動風雲而潤江海斯皆紀」
普段の自分の字とは違うタイプの字に挑戦しようと思い、選びました。楷書の作品を本格的に書くのが久しぶりで、集中力が要るのでなかなか大変です。



四十四．家倉凌　三回生
創作　仮名　『わすれ咲き』　色紙大
「わすれ咲き」
「忘れ咲き」とは周りの花々に遅れて、忘れられたように、あるいは思い出したかのように、ポツンと一輪、花が咲くことです。
見てくださった皆さんの思い出の中で、何日か、何か月か、何年か後に、ふっ、と忘れ咲くような作品を目指して。

四十六．上井晴仁　二回生
臨書　行書　黄庭堅『黄州寒食詩巻跋』　半切
「東坡此詩似李太白猶恐太白」
「跋」というのは感想という意味らしいです。他人の書に対する感想文にすら技巧をこらし、それ自体が作品となるとは書家の情熱と書家の世界の大変さが分かるような気がします。



四十七．新井一矢　二回生
臨書　篆書　『中山王セキ方壺』　全紙
「隹十四禾中山王セキ命相邦…」
一目神秘的でエキゾチックな印象を受けるこの文字。しかし、金文を代表する作品の一つであり、これを模したパソコン用フォントが作られるなど、現代でも有名かつ人気のある文字です。針のような繊細かつ強靭な線質、そして極端に縦長な、それでいて凛とした美しさを感じさせる文字の造形をお楽しみください。



四十八．上西隆太　二回生
臨書　草書　孫過庭『書譜』　半切二分の一
「夫自古之善書者漢魏有鍾張之絶音末稱二王之妙王羲之云頃尋諸名書…」
初めての細字の作品です。草書の基本となる字形、筆遣いを学ぼうと書譜を臨書しました。半切二分の一というサイズの紙面を充実させ、どれだけ作品としてまとめ上げられるかにも気を使ったつもりですが、どこまでまとまったか…。ただ、草書の書く楽しさを感じられたのが何よりです。



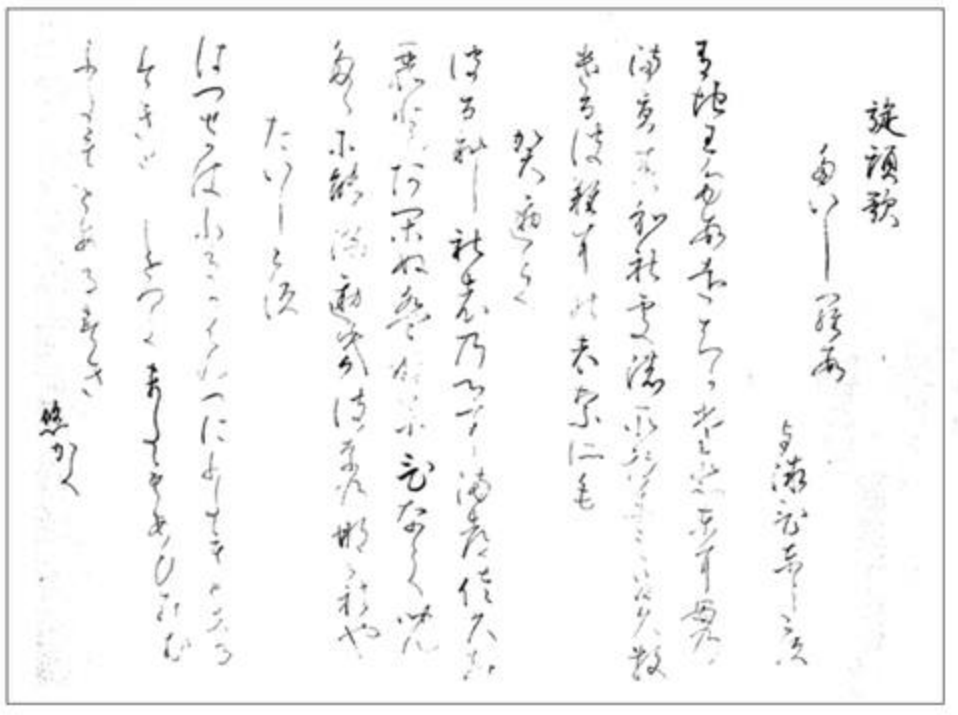
五十．王隽斉　三回生
創作　行書　『風景』　半切
「小さなハスが尖ったつぼみの一端をのぞかせるや（早くもトンボがその上にとまっている）」
創作をチャレンジするのも始めてで、でかい字を書くのも始めてです。初夏っぽい爽やかな作品を書こうと思ってこの句を選らんだが、どうやら行き詰まるところがいっぱい。といっても、創作の過程はやはり楽しくて新鮮感が溢れている。

四十九．牛山泰喜　二回生
臨書　行草　傅山『七言絶句―夜宴安樂公主宅―』　半切
「濯龍門外主家親、鳴鳳樓中天上人。自有金杯迎甲夜、還將綺席發陽春。」
もともとの作品をかなり異なるサイズの作品に仕上げたため、もともとの作品らしさとダイナミックさを残しつつ、構成に気を配りながら書きました。





五十一．岡本悠　三回生
臨書　仮名　『高野切第三種』　半懐紙
「旋頭歌　多いし羅数　与微飛東之良須…」
勢いで選んだこの作品ですが、漢字が多く途中で何を書いているのか分からなくなり、大変でした。書展が開催される頃にはすらすら読めるようになりたいです。



五十二．角谷遊野　二回生
臨書　楷書　欧陽詢　『九成宮醴泉銘』　半切
「尤至於炎景流金無欝蒸之気微風」
あらゆる点で苦しみました。この作品を通じて少しはまともな楷書が書けるようになったと思いますが、忙しい中での無計画な作品制作ゆえ、納得のいく作品ができたかどうか不安です。ご批評よろしくお願いします。



五十三．片野裕太
臨書　梁同書『唐書王涯語軸』　半切
「夫行道之人徳行文学為根株正宜剛毅為柯葉」
梁同書という人は全く知りませんでしたが、法書を見てたぶんですけど、仕事できる系のみんなから頼りにされてそうな人な気がしました。字の雰囲気だけでも近づけたらと思いましたが、まだまだでした。精進します。



五十四．釜阪紘平　二回生
創作　隷書　『青風萬里春』　半切
「青風萬里春」
意味は、青い風が吹き、どっからどこまでも春だな、という感じです。僕は書道よりきのこを優先することが多く、なんで自分がここにいんのか分かんなくなることもあります。でも、なんだかんだおもろくて、こっちもぼちぼちやってます。これからも、僕らしい創作をしたいです。



五十五．藏岡凌平　二回生
臨書　隷書　『礼器碑』　半切
「脩造禮胡輦器用存古舊宇慇懃宅廟」
初めての隷書に挑戦してみましたが、碑文を臨書する時にいつも頭をよぎる「そっくりそのまま臨書することを疑い、自分の解釈を入れてみる」というのは恐れずに実践したつもりです。果たしてそれが吉と出るか、凶と出るか…。ご批評のほどよろしくお願いします。



五十六．神保里帆　二回生
臨書　草書　王羲之『十七帖』　半切
「慰情企足下数使命也謝無奕外任数書問無他仁祖日往言尋悲酸如何可言」
生まれて初めて草書に取り組んでみました。



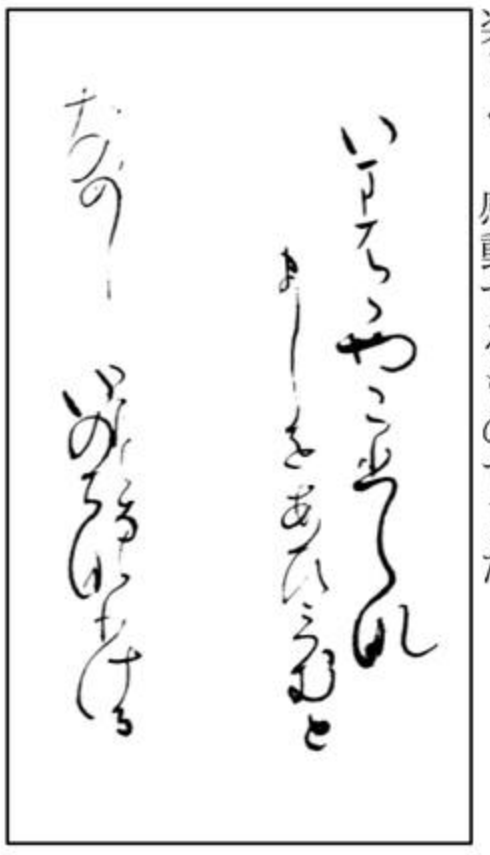
五十七．石博昭　三回生
創作　草書　『不留』
半切二分の一
「八月霜飛柳遍黄蓬根吹断雁南翔…(以下略)」
ここに留まってはいけない



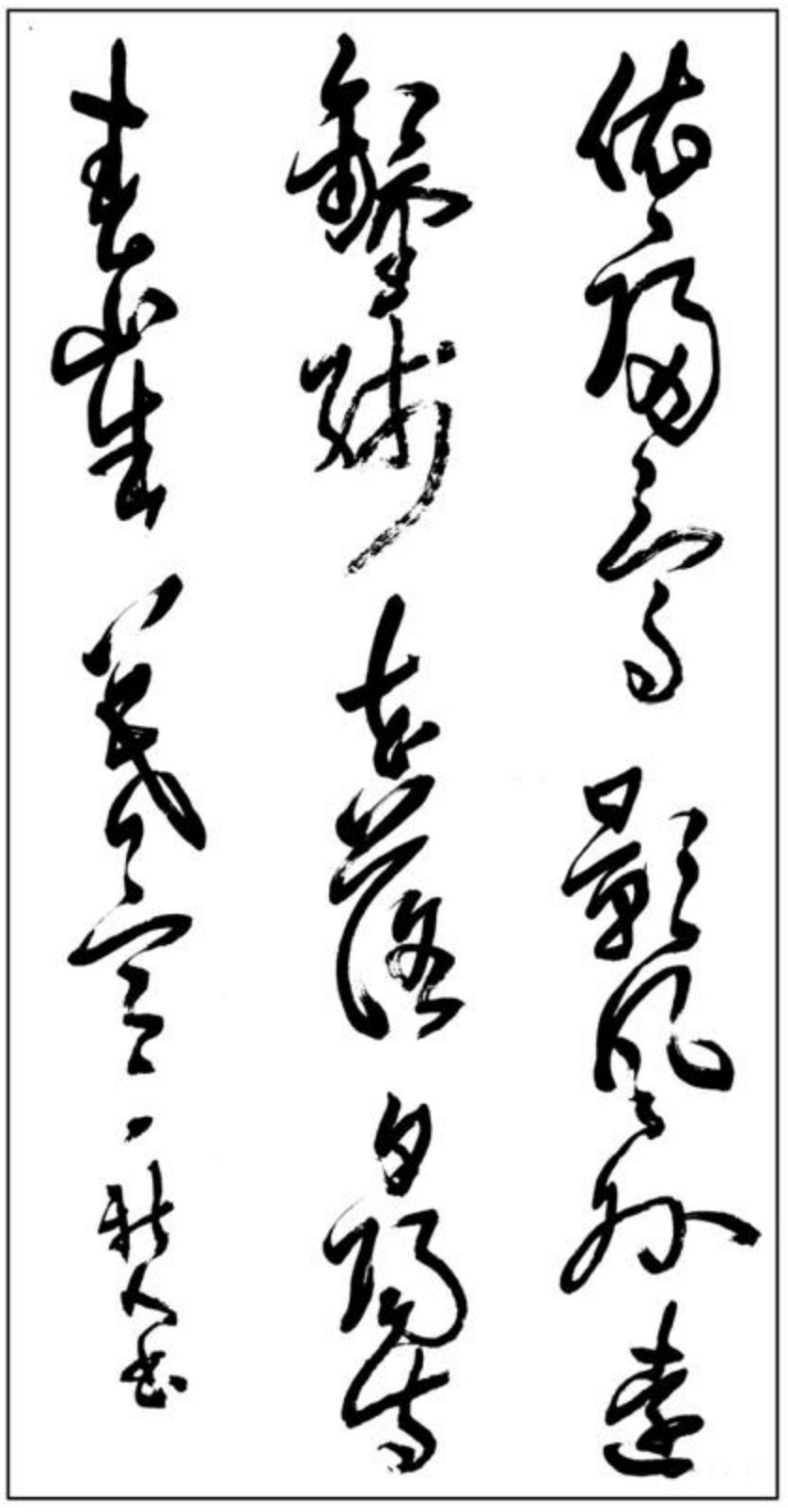
五十八．島津七明　二回生
臨書　楷行書　聖武天皇『雑集』　半切四分の三（幅）
細い線を綺麗に書くのと、独特の雰囲気を出すのがとても大変でした・・・。



五十九．白谷暢浩　二回生
臨書　仮名　伝藤原行成『升色紙』　色紙八枚（半切）
釈文「いま(万)は(者)ゝやこひ(悲)しな(那)　ましをあひみ(三)むと　たのめしこと(登)ぞ(曽)　いのちな(那)り(利)ける」
以前臨書した「針切」と同じ作者とされる「升色紙」を臨書しました。
小さな色紙の中で線の強弱、太さが巧妙に配置されており、臨書していても実に楽しく、感動するものでした。



六十．鈴木新人　修士一回生
創作　草書　『春とはいえ、夕暮れになるとまだ肌寒い』　全紙
「依依歸鳥影風外遠鐘殘花落夕陽寺春山生暮寒」
春頃のまだ肌寒い季節に書きました。全紙という広い面積で自分の文字たちがどのくらい存在感を出していけるのかを目指しました。



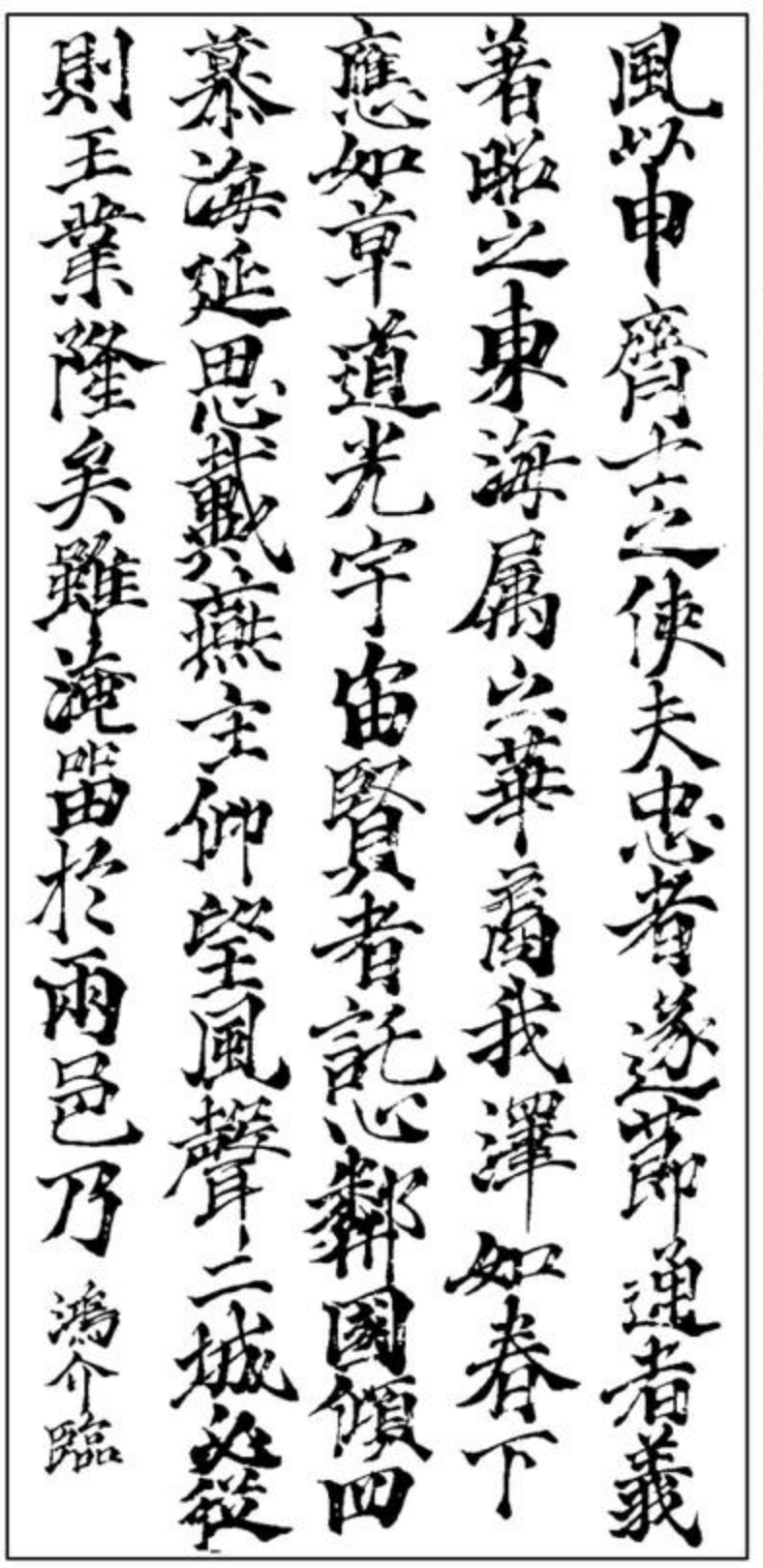
六十一．宗哲仁　二回生
臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切
「然而天地苞乎陰陽而易識者以其有像也陰陽處乎天地而難窮者以其無形也」
蘭亭序以外の王羲之の古典を書きたかったこと、作品決めの段階で部内に褚遂良の「雁塔聖教序」を書いている人が多かったこと、王羲之の字を集めて作品にするという発想に面白さを感じたこと、この三つが合わさり、これを書くに至りました。書いているうちに気づいたのですが、どうも私は王羲之の線が好きなようです。



六十二．武田桃子　二回生
臨書　行書　趙孟頫『前後赤壁賦』　半切
「扣舷而歌之歌曰桂棹兮蘭槳擊空明」
雰囲気がスタイリッシュだったため、この作品のこの部分を選びました。特に蘭や槳の字がお気に入りです。自分で書く場所を選んだり、紙のどの位置にどの文字を書くかなどの構成を立てるのは初めてでしたが、とても勉強になりました。原作の文字の持つかっこよさや美しさを少しでも表現できていればいいなと思っています。



六十三．辰巳鴻介　三回生
臨書　楷書　光明皇后『楽毅論』　全紙
「風以申齊士之使夫忠者遂節通者義…」
筆圧の強い線、重心のずれた字、字間の密と行間の疎の美、名将楽毅の生き様を表しているように感じました。
書道って面白いですね。



六十四．寶官紗紀　二回生
臨書　草書　嵯峨天皇『哭澄上人詩』　半切
「居燈焰残空座香煙続像炉蒼生橋梁少」
嵯峨天皇の字に一目惚れして、中でもこの「哭澄上人詩」の独特の雰囲気が良いなと思い、臨書に挑戦しました。構成で悩んだり、細い線を綺麗に出せず悩んだりと、なかなか上手くいかず、練習不足もあってまだまだな点が多くあると思いますが、せめて雰囲気が出せていれば、と思います。ご批評のほど、よろしくお願いします。

六十五．辰巳鴻介　三回生
創作　楷書　『巌華～イワオノハナ～』二、六×六尺
「巌華」
巌（岩の塊）に負けない華のように…

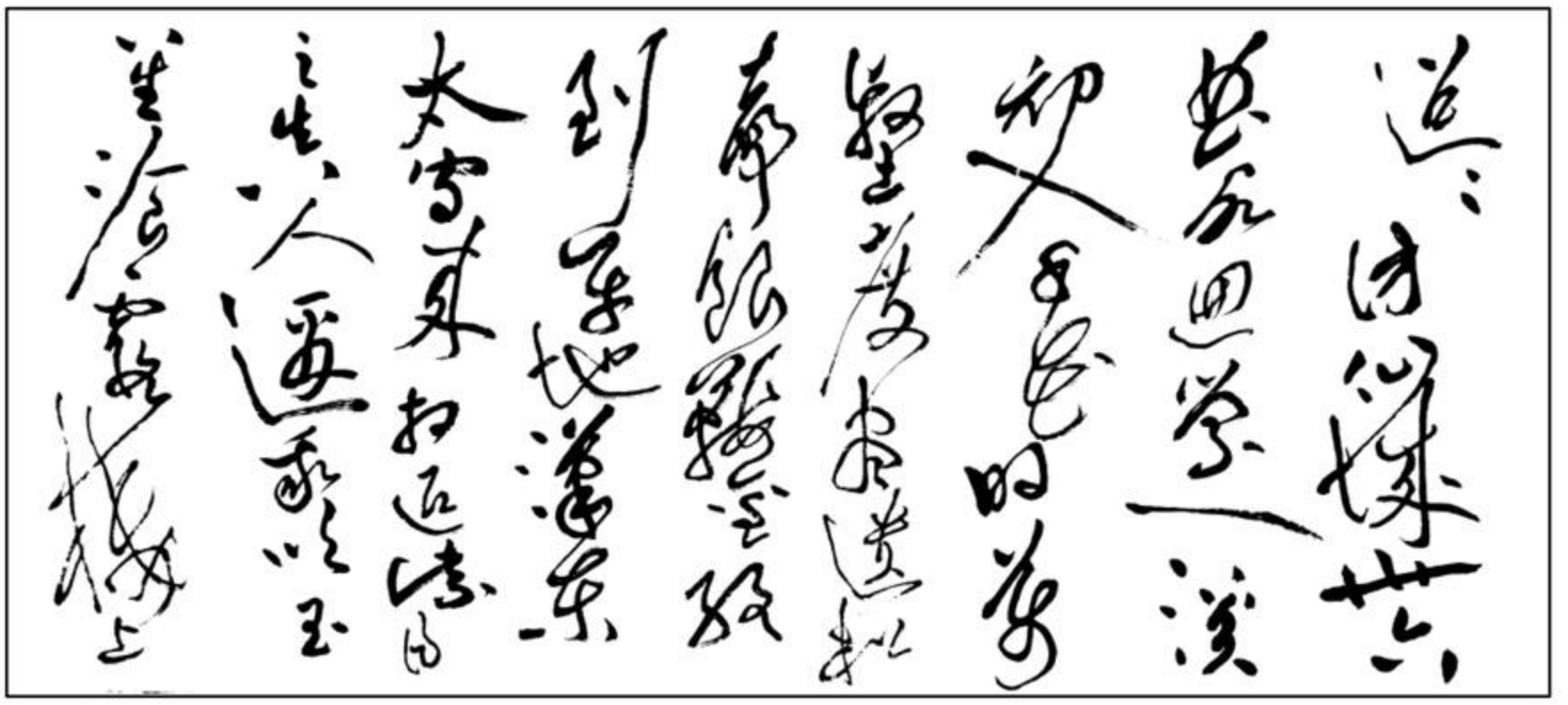


六十六．三回生　中谷百花

臨書　草書　黄庭堅『李太白憶旧遊詩巻』　半切巻子

「迢々訪仙城卅六曲水廻縈一渓初入千花明萬壑度盡遺松聲銀鞍金絡到平地…」

この法帖を選んだのは、一回生の時に柔軟でありながらも強い意志を持っているかのようなこの線質に一目惚れして以来、ずっと書いてみたいと思っていたからです。原本の老成した雰囲気に少しでも近づけることを意識しました。かっこいいと思っていただけるような作品に仕上がっていれば、と思います。

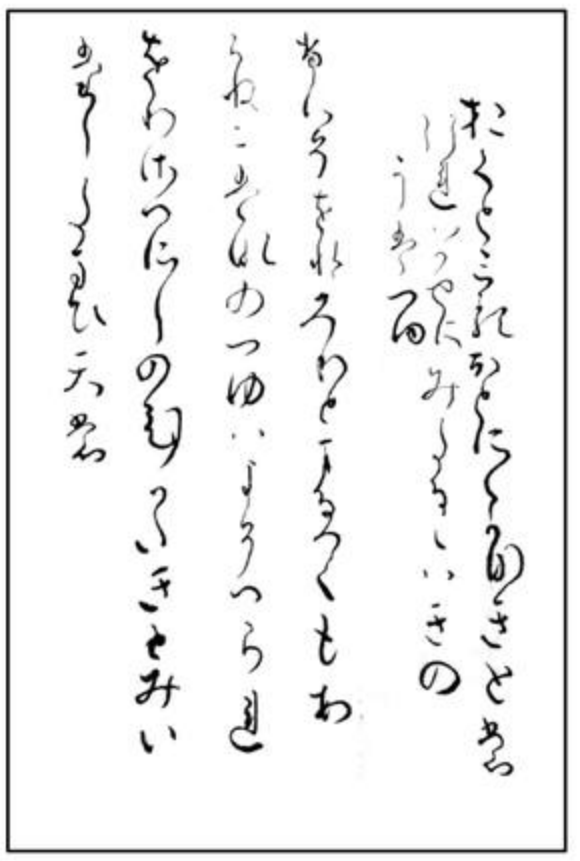


六十七．宮下拓也　三回生

臨書　仮名　伝藤原伊房『源氏物語絵巻〈御法〉』

「おくとみるほどぞはかなきともすればかぜにみだるるはぎのうはつゆ　げにぞ、をれかへり、とまるべくもあらぬに、はなのつゆはよそへられ、をりさへぞしのびがたきと、みいだいしたまひても」

高校の古典の授業では『御法』巻はとばされました。大学生になってから自分で読んでいるうちにもっと自分のものにしたいと思い始めた臨書です。



六十八．家倉凌　三回生

創作　仮名『空に吸はれし…』　半切

「こ春可多能於しろの草二年ころ悲天曽ら二す者れし十五の心」（読み）こずかたの　おしろの草に　ねころびて　そらにすはれし　十五の心

同郷の詩人、石川啄木に敬意を表して。



六十九．山﨑絢香　二回生
臨書　行書　空海『風信帖』　半切
「風信雲書自天翔臨披之閲之如掲雲霧兼恵止観妙門頂戴供養不知攸厝已冷伏惟」
字の濃淡強弱大小バラエティ豊かなものにしたいという気持ちとまとまりのある作品には仕上げたいということでバランスに悩みましたがこのようになりました。歴代の先輩方が書かれてきた風信帖ですが、私なりのものになっていればいいなと思います。



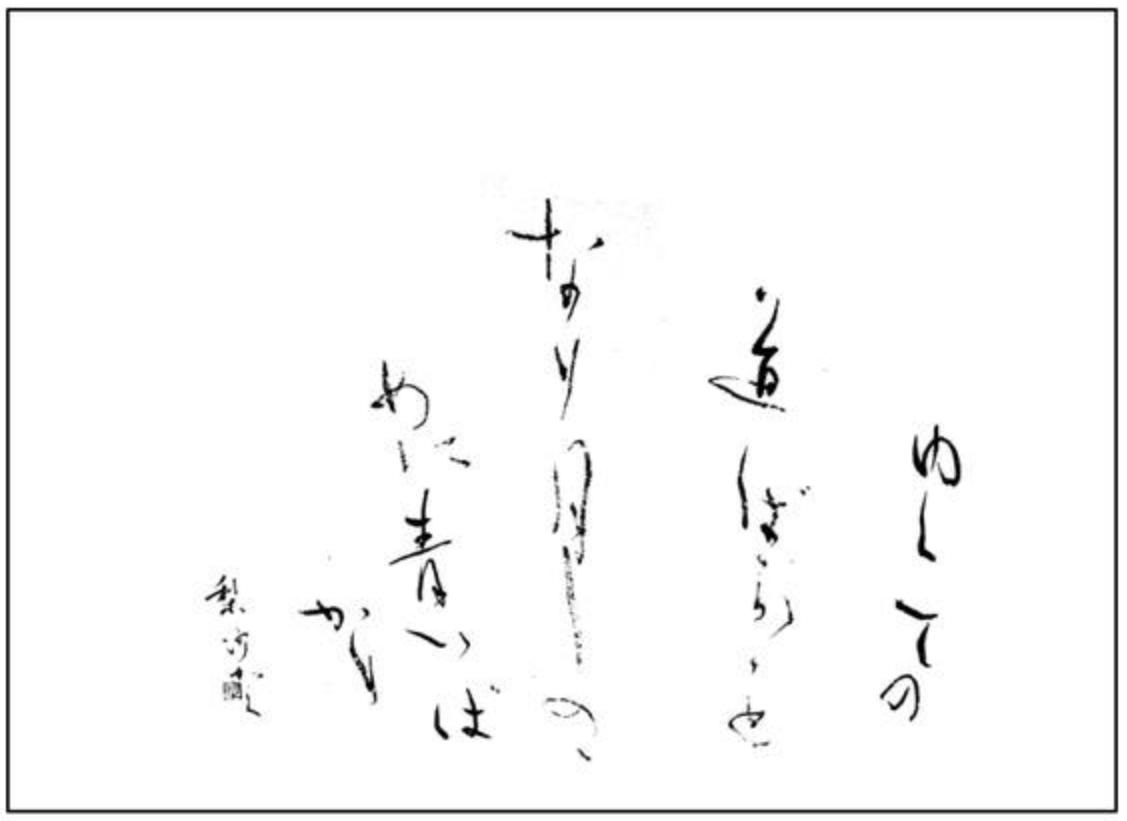
七十．山下燎亮　二回生
臨書　行書　黄庭堅『松風閣詩巻』　半切
「臺驚濤可書眠恬亭看篆蚊龍纏安得以身」
行書初めてでしたけど楽しかったです！
元々去年の冬樟展で当時四回生だった先輩が書かれていた作品がカッコよくて同じ人の作品を書こうと思っていたのですが、結局臨書する作品もその部分も同じになったと思います。先輩に並べるような素晴らしい作品になっているかわかりませんが、ご鑑賞いただければ幸いです。



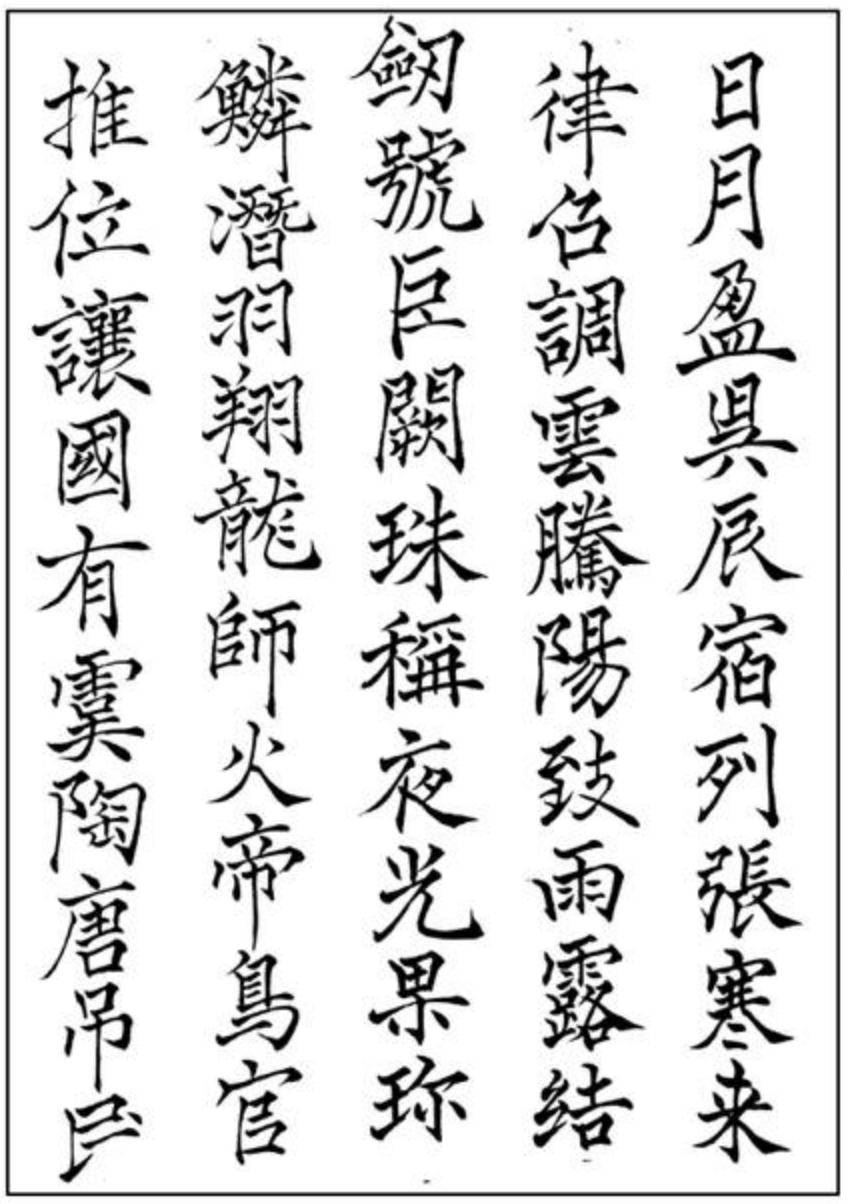
七十一．山脇謙　二回生
臨書　行草　王籠『荷花蕩六絶句巻』
半切
「青山如屏碧水廻。萬朶菡萏參差開。
歌船舞棹垂揚畔。」
字の大きさや形、構成を法帖とはところどころ変え、臨書作品ながら工夫を入れることでまとまった構成になることを目指した。



七十二．吉田梨沙　四回生
創作　調和体　『ゆくての道』　約半切三分の一
「ゆくての道
ばらばらとなり
月　しののめに
青いばかり」
立原道造の詩「ゆくての道」の世界を書で表現しようと試みました。夜明け前の微妙な色合いの空、そこに浮かぶ青い月を見つめる。独り佇む人間の存在を感じます。



七十三. 吉村友希　二回生
臨書　楷書　褚遂良『楷書千字文』　三尺×六尺二聯



「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歲律召調陽雲騰致雨露結爲霜金生麗水玉出崑崗劒號巨闕珠稱夜光果珎李奈菜重芥薑海鹹河澹鱗潛羽翔…(以下略)」
どんなに字数が多くても、一文字、一画丁寧に書くことを意識しました。楷書が好きだという思いと、このような大きな作品に挑戦させていただけることへの感謝の気持ちをこめて、一生懸命書きました。

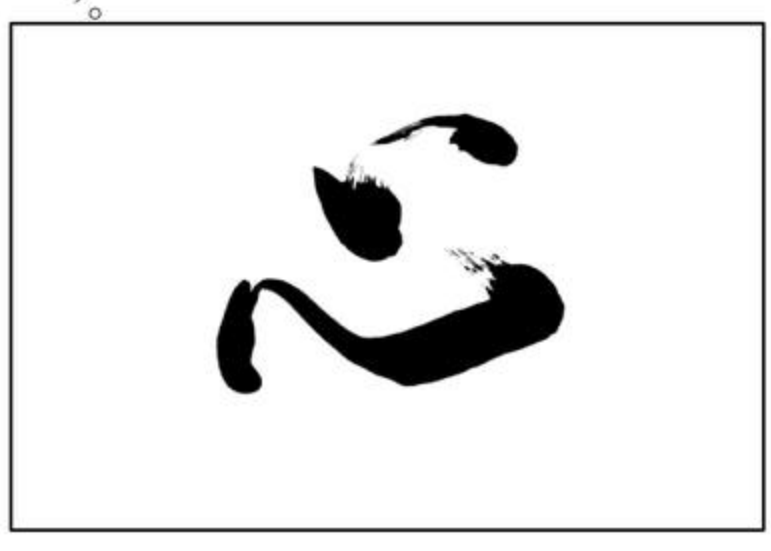
七十四. 小野愛実　修士一回
模刻　鄧石如『画梅乞米』　豆色紙
「画梅乞米」



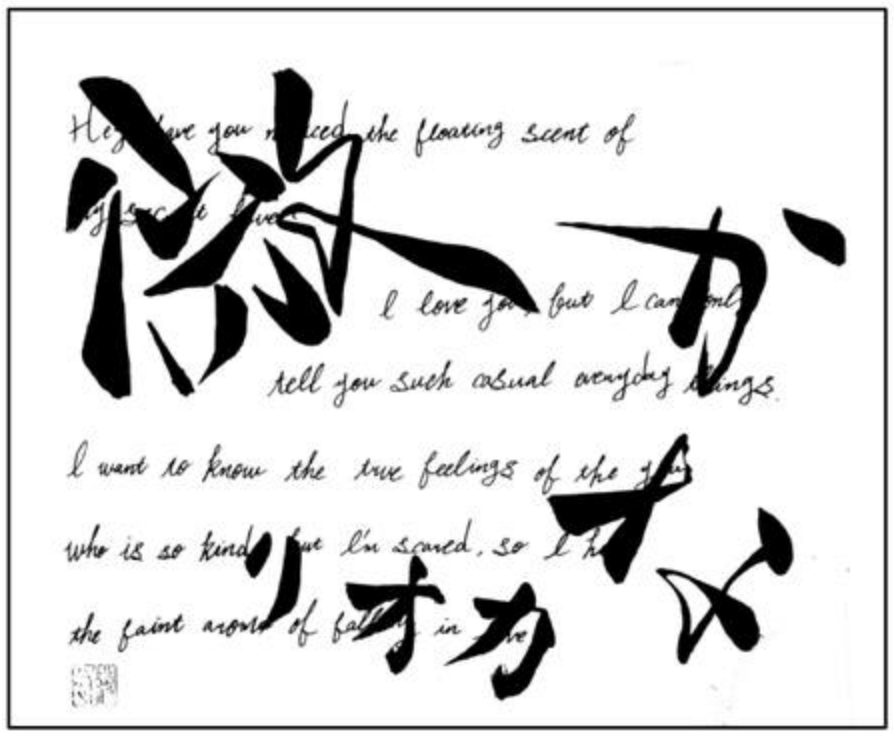
なんとなく目に止まった印を彫りました。なんとなく目に止まる作品になっていればいいと思います。自分で彫ると線が単調になりがちで、味を出すのが難しかったです。

七十五. 川上澄香　四回生
模刻　『談岑山寺』　色紙
「談岑山寺」
芋っぽい丸い部分と直線的な部分が共存していて面白いなぁと思って模刻してみようと思ったのですが、ぬるっとした感じに彫るのがとても難しかったです。また、別の印をデザインしていましたが、バランスを崩さずにこの線を彫れるのは難しいことなのだなぁと気づきました。

七十六. 菊池悠里　四回生
創作　行書　『心』　色紙
「心」
「こころ」というと何かぼんやりした感じがしますが、「心」の字には「中心」「核心」というように物事の「真ん中」、「かなめ」の意味があり、またその由来は「心臓」の形であると言われています。「心」を大事にしたいという思いを込めて。



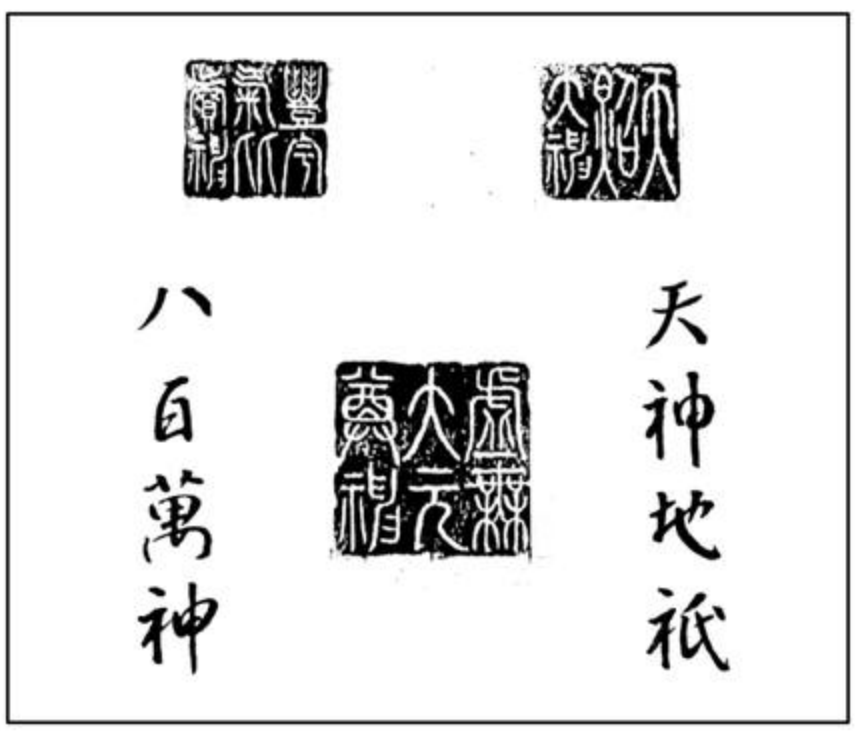
七十七. 島津七明　二回生
創作　行書　『微かなカオリ』　色紙
ここ3年ほど、ずっと私のiPodで再生回数1位の大好きな曲の歌詞を書きました。



七十八. 小野愛実　修士一回
模刻　鄧石如『画梅乞米』　豆色紙
「画梅乞米」



七十八．東村智佳　三回生
創作　篆書　『八百万神』　色紙
「天照神 豊宇氣比売神 虚無大元尊神 天神地祇・八百萬神」
吉田神社の節分祭にいったとき、日本全国の神々が祭られているという大元宮にもお参りしたのですが、その拝殿の並び方が非常に特徴的でした。そこで祭られている神々の名を彫り、大元宮の境内図の通りに押印して表現してみました。ちなみに、これは吉田神道の教義に従って宇宙軸を表しているそうです。



七十九．四回生　山本大翔
創作　調和体　『乱舞のメロディ』　色紙
「静かに静かに幕は斬りおとし・・・」
いつものとおりの自己満足作品です。Miwa、aimer、椎名林檎の次は、シドのを書いてみました。今回は軸作品が書けなくこれしか書いていないですが、目についてもらえたら幸いです。



合作

八十．新入生合作　全紙二枚
「風薫る鴨川」
新入生の皆さんに、「初夏」をテーマに筆を回して筆伝をしてもらいました。爽やかでエネルギッシュな作品を楽しんでいただけたらと思います。

八十一．二回生合作　『恋文～あなたと私の右払い～』
はじめての合作。はじめての恋。

八十二．全体合作　『世界へ羽ばたけ！京大書道部！』
「行きたい国または都市の名前と其処でしたい事」という漠然としたテーマの下で部員の個性が集まりました。世界に誇る(？)我ら京大書道部の少し変な回答をご覧ください。

お客様参加企画　～和歌の架け橋～
今回、初夏書展の会場である西来院・禅居庵にスペースを設け、和歌を写して書道を体験していただくコーナーを用意しました。西来院で上の句を、禅居庵で下の句を写すと、一つの作品が完成します。出来上がった作品は、ご来場の記念としてお持ち帰りください。

夏の夜は　まだ宵ながら　明けぬるを
雲のいづこに　月宿るらむ
清原深養父



This book was
made by the LeME